

「ネルソン小児科学」

原書第10版

V. C. Vaughan, III, R. J. McKay 編

中山 健太郎 東邦大学教授
奥田 六郎 京都大学教授

監訳

大阪大学教授

藪内 百治

ネルソンの Text Book of Pediatrics の日本語訳がはじめて出版されることになったが、このことの小児科領域における意義は極めて大きいと思われる。小児科学を志す人はいうまでもなく医学生に至るまで、ネルソンの小児科学の名前を知らない人はいないであろう。それほどまで古い歴史をもって磨きぬかれた名著であり、日本の数多くの小児科学教科書がネルソンの小児科学を範として書かれている。したがって今さらネルソンの小児科学の内容について云々することはないし、また監訳者の中山教授がネルソンの教科書が如何に変遷し、すぐれた形にととのえられたかを序文に書いておられ、それがそのまま本書の書評にもなっている。

私が小児科医を志すようになって初めて自分で買った小児科学書が、Mitchell-Nelson の第5版(1950)であった。当時 Cecil の内科学書と Mitchell-Nelson の小児科学書はアメリカの教科書の双璧をなすものであった。私の学生時代はドイツ医学の教育をうけた先生方に教えられ、

使用した参考書もドイツ語の本が多く、英語の病名やその他もろもろの medical term にはとっつきにくく、Mitchell-Nelson は辞書を片手に読んだことを憶えている。したがってその当時、読みながら常にまどろっこしさを感じており、これが日本語であればとよく思ったものである。その後はアメリカ医学のとうとうたる移入によって、講義にも英語の medical term が使われるようになり、英語の教科書への親しみを増しており、最近の若い医師や学生たちにとってはドイツ語の教科書よりはむしろ英語の教科書が普通となっている。とはいってもやはり外国語の教科書は、日本語を読むほどには気軽に読まれないうらみがあり、医学生がネルソンの教科書に親しむ機会は比較的少ないように思われる。同じようなことは実地医家にも共通しているようで忙しい診療の間に一寸しらべたいと思う時は、やはり日本の比較的詳しい小児科学書を参考にすることが多いようである。しかし日本の小児科学書はネルソンを範としていながらネルソンを抜くものは

ないようである。ネルソンの編集者である Vaughan, McKay の序文には医学生、看護婦、その他の医療従事者に至るまでの利用が期待されており、本書の日本語訳によって、日本でもこれらの人々の利用が大変便利になったことは喜ばしいことであり小児科学の発展にも寄与する処が大きいと思われる。

本書の翻訳者の方々はすべてその方面の専門家ばかりで、英文も内容も熟知の上で原書に忠実に翻訳されている。訳本というのは一般的に読み辛いものであるが、監訳者の御努力もあり極めて読み易い文章となっており、関係された方々の御苦勞に敬意を表したい。さらに喜ばしいことは1,700余頁の大部な本であるが1冊にまとめられており、豊富な内容にもかかわらず比較的安価に購入できることである。内容面、価格面の両面から幅の広い利用とその成果が期待される。

B 5 頁1802 図175 写真546 原色
図19 色図 1 1979 ¥34,000
〒600 <医学書院刊>